

日本の化粧意識の近代化をめぐる比較史的考察——清潔習慣の展開をめぐる

奈良女子大学 生活環境学部

鈴木 則子

The aim of this paper is considering the relation of makeup and development of the concept of cleanliness in the late Edo period, and comparing it with European cosmetics consciousness.

In the Edo period, the textbook for girls used at the educational institutes encouraged washed the body, and keeping it clean, the textbook for boys does not contain such a statement. This is because cleanliness was deeply connected with one of the virtues of the woman "fuyo (婦容)".

The makeup document in the late Edo period "Miyako Fuzoku Kewai-den (都風俗化粧伝)" teaches the repairing method for aiming at the skin not to carry out oil or grease to keep clean, and white with powder, and the medicine for removing body odor, and the "Kinsei Fuzoku-shi (近世風俗志)" of the period points out current fashion of the hairstyle using only light makeup without perfumed hair oil. It was the beauty which will not be able to be realized without the thorough body management which pursues the beauty of the natural body. These new makeup customs pass to aesthetic senses, such as "ada (婀娜)" and "iki (意気)". Although the opportunity of light makeup of Edo has been conventionally explained in connection with customs control of Tempō reform, probably, the side of the thorough cleanliness accompanying it should also be indicated to be the spread of the bathing customs in the second half of Edo.

On the other hand, fashion of light makeup will be seen also in Europe after the 19th century. By having given encouragement medically, it is deeply concerned with the odorless body in which the bourgeoisie aim transparent body that neither closes pore with dirt nor with cosmetics. The leaders of Japanese clean culture and light makeup fashion were common people represented by prostitutes, and that was a remarkable difference between Japan and Europe.

1. 緒言

私はこれまでの研究で、江戸時代後期における庶民の化粧意識が、従来の嗜みとしての化粧の域を越えて、自分の身体をどれだけ価値あるものに演出するか、という積極的意識に変化することを明らかにしてきた¹⁾。その背景には社会全体が、身体は自分の努力次第でより価値のあるものへ変えられる、という近代的な身体観にからめ取られていくという変化があったことも指摘した。現在は江戸後期の化粧意識の変化を、欧米・韓国・中国の化粧意識との比較の中で考察することによって、化粧意識の近代化の日本の特徴を明らかにすることをめざしている。

この研究助成報告においては、日本社会における「清潔」概念の展開に焦点をあて、それが美容意識にどのような影響を与えたのか、またヨーロッパの「清潔」と「化粧」の関係の仕方との比較を行う²⁾。

2. 身体をめぐる女子教育

江戸時代、体を洗って清潔にすることを、より直接的に説くのは、庶民の女子教育の場で使われた女訓書である。ま

ず江戸時代の和製の女訓書のさきがけであり、後の女訓書に多大な影響を与えた、貝原益軒著『女子を教ゆる法』(1710年)³⁾を見てみよう。本書は女性が努力すべき四つの徳目のひとつに、「婦容」をあげる。「婦容とはかたちをよきをいう。あながちに飾りを専らにせざれども、女は容なよやかにて、雄々しからず。装いのあではか(上品)に、身持ちきれいにいさぎよく、衣服もあかつきけがれなき」をよしとしている。美しくあることは女性のつとめであり、美しさには「身持ち」、すなわち身体を「きれい」に「いさぎよく(潔く)」することも含まれた。

『女大学宝箱』(1936年)⁴⁾は、『女子を教ゆる法』の基本的教育方針を継承しながら、様々な実用知識も網羅した大部の女訓書である。その後の女訓書は、本書の内容の一部分を展開して一書を成す形を取ることが多い。本書は装いについて、華美な衣装を禁ずるとともに、「身と衣服との穢れずして潔げなるはよし」と述べる。身体に付着する垢も、衣服に移った垢も、汚らわしく、その人自身を醜悪にするものとみなされた。

だが、ひとつ考えねばならないのは、体を清潔に保つことを勧める言説が、女訓書に限定されていて、男子の用いる寺子屋用教科書には、殆ど登場しないという点である。清潔は、とりわけ女子に厳しく強要される徳目だったらしい。江戸の銭湯における糠袋の使用率が、男性よりも圧倒的に女性の方が高いことも、その反映だろう⁵⁾。

「銭湯へ行かぬで下女は毒づかれ」⁶⁾という川柳がある。下女のような下層の女性であっても、湯で垢を落とすことは不可欠の社会常識であって、他者から非難されるものだ



Modernization of the makeup consciousness of Japan — Deployment of a clean custom.

Noriko Suzuki

Nara Women's University

った。だがここで非難されるのが、下男ではなく下女であることに、注意しなければならない。なぜ女子は、男子よりも清潔を心がけねばならなかったのだろうか。それは身ぎれいにすることが、「婦容」という容姿に関する女性独自の徳目に含まれることと関係している。

3. 美しく臭わない身体

女性の美しさと身体を洗うこととは、どのように関連づけられていたのか。この問題を考えるために、美容関係の史料をひもといてみよう。江戸時代、化粧法に関連する記事を比較的詳しく載せた女性向けの本は、10種類ほど確認されている⁷⁾。中でも『都風俗化粧伝』⁸⁾は、その量と詳しさで群を抜く。本書は1813年に出版されて以来、1922年に至るまで、幾度となく版を重ねた、化粧本のベストセラーだった。

その出版年が示すように、ここに説かれる化粧法等は、江戸後期の流行と嗜好を示すものである。出版されたのは京都で、著者も京都の公家という形を取る。これは京都が江戸時代中後期以降、経済の中心から退いた後も、実態はともかく、形の上では一貫して文化、とりわけファッションの中心地であり続けたことを示している。京・大坂を示す「上方風」という言葉は、ある種の憧憬を持って江戸の女たちの心を捉え続けたのである。

さて、本書はその冒頭で「みがきよそおわざればひかりなし」と断言する。女子の容貌の美しさは、玉と同じで磨くか否かにかかっており、どのような醜女でも磨けば美しくなることができるという。そして以下、具体的に肌の手入れ法、化粧、着物、髪の手入れ、髪型などについて詳しく説明している。本書から、当時どのような女性が美しいとみなされたのか、また女性がどのような美を求めて努力をしていたのかを抽出してみよう。

本書のかなりの部分を占める記述は、肌を美しくする、もしくは美しく見せる方法である。特に白くて、かつ油が浮いていない肌が理想とされた。本書の記述は、読者が毎朝糠を用いて湯で洗顔していることを前提にしているが、その糠に種々の漢方薬などを混ぜて洗うよう勧める。しかも、それは単に顔面に限定されない。白い肌は全身に及ぶことが求められ、行水や銭湯での入浴の際には、こういったものを全身にすり込むよう指示される。そして曰く、「或る人の処女、生まれつき色黒きを嘆き、或る家に秘め置きたるこの法をつたえ用いしかば、忽ち色を白くして、双なき美人となりたる奇法也」。肌は努力次第で白くなり、白い肌は美女の誉れを保証した。

髪の新しさも、洗う頻度にかかっている。「髪を洗うことは、髪をつやを出だし、髪脂（あか）ねばりを去らんがためなれば、たびたび洗うてよし。夏の日には汗と油の腐りたるにて、はなはだあしき臭いすれば、嗜みて、ことに

たびたび洗い、悪しき臭いを去るべきことなり」とある。艶やかでべとつかず、汗くささのない髪がめざされた。

それ以外の全身のみだしなみとて、おろそかにはできない。「女の身の嗜みのよしあしにて、その人の意気よく見ゆるものなれば、心を用い、身だしなみを専一とすべし。身だしなみのあしきは、大いにけおとされて、あなどられ、笑わるるもの」だからである。具体的には、爪垢・耳垢を除き、鼻毛、耳の毛といったむだ毛を処理し、口の中の清潔のために毎朝歯ブラシで歯垢を取り、舌槽を除いた。口臭、体の汗の臭い、髪臭いも常に注意することが求められた。身体から汗が出るのを止めるためには、薬草を煎じて飲んだり、米の粉を全身にはたく。口臭をおさえるのには、薬草を粉にして食後に飲んだ。腋臭は、薬草を脇の下に塗る。清潔のための身体管理は、単に肌の表面上だけではなく、体臭の管理にまで及び、入浴だけではことたりなくなっていた。

清潔で臭わない身体を実現するための熱意は、式亭三馬著『浮世風呂』⁹⁾に登場する人々の、念入りな入浴風景と重なってくる。糠や洗い粉で身体を洗うだけでは飽きたらず、舌を洗ったり、さらには「腋臭ぶんぶん」(『浮世風呂』)とそしられぬために、身体から発散されるあらゆる臭いを排除しようとした。

ことさらに女性に要求された、身体を磨くという徳目、これを実践する、いかにも受け身に見える女性たち。しかしながら彼女たちは、その磨き抜いた身体にふさわしい、新しいファッションの流れを作り上げた。

4. 薄化粧の流行

『近世風俗志』¹⁰⁾は、江戸時代後期の江戸・上方それぞれの化粧風俗について、詳しく紹介している。1809年生まれたの著者・喜田川守貞は、「美人」とは時代によって変化するものであると断った上で、「今世絶世の美貌」の絵を載せている。この図に添えられた、「江戸洗ひ髪兵庫結び」という髪型の名前に注目したい。まず「江戸」という言葉から、彼女の美しさが上方ではなく、江戸のものであったことがわかる。また「洗い髪」が意味するのは濡れた髪ではなく、洗髪後、鬢付け油で固めたり、香油を振りかける前の状態をいう。本来は、洗髪後にきちんと髪を結うまでの、一時的な髪型に過ぎなかったのが、ひとつのヘアスタイルとして流行していったのである。守貞によれば、当時こういった風貌の女性を、「婀娜（あだ）な女」、「意気なあねさん」といった。しかも、この女性の年齢を守貞は、当時花盛りの年齢とみなされた二八(16才)の娘ではなく、二十歳過ぎの「中年増」、つまり成熟した女性に設定している。江戸時代後期の江戸に出現したこの新しい美意識、「婀娜」・「意気」とは、どのようなものだったのだろうか。

『浮世風呂』の描写する、入浴中の二人の下女の会話は、

「婀娜」という江戸の美意識をよく示す。「なぜあんなに上方風を嬉しがらうか、気がしれねへよ。」「さうさ。あのまあ、化粧の仕様を御らんか。目のふちへ紅を付け置いて、その上へ白粉をするから、目のふちが薄くなって、少しほろ酔いという顔色に見えるが、否なことたねへ。」「そしておめへ、そればかりぢやねへはな。顔の白粉と生際の白粉とは、別々にあっての、眉掃きも三本入るとさ。」「をや大騒らしい。私らは眉掃きさへ遣ねへものをや。」「それだからあのぞまをお見。本面屋ともいひさうに、顔がてらてらして誠に本塗りだはな。あんまりべたべた化粧したのも、助兵衛らしくしつつこくて見つともないよ。諸事婀娜とかいって薄化粧がさっぱりしていいはな。」

町で見かける上方風の化粧の女に対する、同性としての辛辣な批判であり、手間暇かけた厚化粧を「助兵衛」と受け取る感性は、男への露骨な媚びをいさぎよしとしない姿勢のあらわれである。

自然な髪、薄化粧を尊ぶ「婀娜」・「意気」の美意識は、当時の女性の化粧や髪型の流行を、大きく変えていった。江戸時代後期、化粧の流行は江戸を中心に、明らかに薄化粧の時代へと移っている。『近世風俗志』は、「今世江戸の粧ひ、平日は素顔多し。式日及他行にも淡粧多く、口紅も桃花色にす。」というような、薄化粧の流れを記す。

その動きの背景は従来、天保改革の贅沢の禁止のためと説明され、上方に比して江戸のほうが薄化粧になるのも、将軍のお膝元のほうが取り締まりが厳しかったからだとされてきた¹¹⁾。しかしながら江戸と上方と比較したとき、両者の差異は、単に化粧の濃さの問題にとどまらない。

たとえば洗髪頻度がまったくちがう。19世紀前半、江戸の女性は毎月一二回髪を洗い、特に夏期は頻繁に洗う。しかも「匂油」や髪に香を焚きしめることもしなくなっていった。ところが上方の女性は減多に髪を洗わず、櫛で垢を梳いて「匂油」で臭気を防いだ。銭湯の数が、江戸と上方では圧倒的に江戸のほうが多いことも、入浴習慣の普及度、すなわち身体を洗って磨き上げる習慣の差を物語る¹²⁾。江戸の女性の、香りも含めて薄化粧をよしとする感性は、単に儉約の結果というよりも、身体を磨くことの延長線上にあるのであって、天保改革という政治的契機によってのみ説明しきれものではない。

山東京伝『賢愚湊銭湯新話』(1802年)¹³⁾は、「そもそも湯上がりの時美しき女はまことの美人なり。はたけ・そばかす・いぼ・ほくろ・頬の赤きも□あ□たも、紅白粉でくろめれば、相応に見ゆるものなり。」と、湯上がりの美女の磨き上げた肌を賛美し、紅白粉でとりつくろった美に対して否定的である。

湯上がりの肌や髪 naturally な美しさ（実はそれが女性たちの涙ぐましい努力の結果であったとしても）への賛美は、それまでの人形のような白塗りの化粧や、油で固めた人工

的な髪的美意識の否定の上に成り立つものである。

このような美意識の変化の中で、理想とされる肌の質感も変わる。17世紀に流行した「花之露」という化粧品は、顔につやを出す油だった。だが19世紀の女性の肌に塗られたのは、顔の脂浮き、てかりをおさえるための、「江戸の水」に代表される、さっぱりとした化粧水である。しかも普通の女性はこれさえあまり用いず、古風を守る御殿女中が愛用した¹⁴⁾。

首筋、襟足の美の表現のしかたにも、変化が見られる。江戸時代、島田髷の普及と人工的な髪への張りによって、バランスの都合上後ろのたぼが小さくなり、襟足が強調されると、襟足にも白粉を塗ることが普及した¹⁵⁾。額、襟足や首筋は、顔よりも一段濃く白粉を塗るのが普通だった。しかし守貞は云う。「近年は頸額とも白粉と肌と際立ず、幽に塗る者もあり。娼妓は幽にする者多きか。然ども坊間には、きつときはたてたと際立ずかすかに粧たると半々なるべし。十女に四人素顔、三人は幽粧、三人は際立てぬる。御殿女中は此形にて際立て粧ふ者多し」。襟足の化粧は十人中四人はしておらず、三人は薄く塗るに留めている。いまだに襟足を真っ白にしているのは、ここでもやはり流行と無縁の御殿女中だけだった。

香りに対する感覚の変化も見逃せない。先に触れた髪だけではなく、衣服に香りをつけることも、江戸ではされなくなる。かつて高価な伽羅を頂点とする濃厚な香りは、非日常の世界への誘いであり、遊女たちの美しさを一層引き立て、舞台装置としての機能を果たした。それは江戸初期の浮世草子における美女の類型的描写に、彼女たちの放つ伽羅の香りが切り離せなかったことから明らかである¹⁶⁾。しかし入浴によってあらゆる体臭を排除してきた清潔志向は、人為的で濃厚な香りをも拒否していく。露骨にあざとい香りは、「粧」の対極たる「野暮」に通じていった。

5. 「いき」の美意識

ここで想起すべきは、「婀娜」や「意気」といった文化・文政期の美意識を論じた九鬼周造の名著『「いき」の構造』¹⁷⁾である。九鬼は「いき」を以下のように説明する。「いき」の内包的構造は、異性にたいする「媚態」、「意気地」、「諦め」の三者に求められる。「意気地」とは、媚態を持ちつつ、なお異性に対して一種の反抗を示す強みを持った意識である。「諦め」は、執着を離脱した無関心であり、これを獲得するには数多の恋を経る必要がある。従って若い女よりも、年増女に「いき」を見出すことが多い。最終的に九鬼は、「いき」を「垢抜して（諦）、張のある（意気地）、色っぽさ（媚態）」と定義する。

そして「いき」の「身体的発表」として、言葉遣い、身振り、体型、表情、装いなどをあげる。このうち、本論考と関係の深い、装いについて紹介しよう。

「いき」な姿としては湯上がり姿もある。裸体を回想として近世の過去に持ち、あっさりした浴衣を無造作に着ているところに、媚態とその形相因とが表現を完うしている。「いつも立寄る湯帰りの、姿も粋な」とは『春色辰巳園』の米八だけに限ったことではない。「垢抜」した湯上がり姿は浮世絵にも多い画面である。

上記の九鬼の指摘は、九鬼の意図するところではないにしても、「いき」と身体を洗うこととの関係性を浮かび上がらせている。「いき」に必要な、「あっさり」と「無造作」であること、「垢抜」けることは、銭湯で身体を洗うという行為を媒介に可能となる。

続けて九鬼は「薄化粧」、油を用いない「水髪」や略式の髪型、首筋を強調する抜き衣紋、ふくらはぎをかいま見せる左袂、冬でも足袋をはかずに素足で通すことなどについて言及する。いずれも日常的な肌の手入れを前提とする美である。守貞のいう「婀娜」・「意気」といった美意識が、上方ではなく江戸の地で花開いたのは、背景に入浴による身だしなみを、より強く求めた江戸文化がある。

入浴によって清潔な身体を保つことは、女訓書によって特に女子に対して徹底された徳目だった。しかしながら、それによって自己の身体と向き合い、磨き抜いた身体でもって女性たちが表現したのは、男に媚びない意志ある美しさ、豊富な人生経験を感じさせる美という、本来の封建的価値観から逸脱した女性美だった。そしてまた、こういった美しさを『浮世風呂』に登場する下女のような、当時広範に存在した、都会に働く女性たちが身近に感じている点に、彼女たちが身体表面だけでなく、内面的にも変化を遂げつつあったことを見て取ることができるだろう。

6. ヨーロッパの清潔と化粧

さて、このように清潔感の展開は化粧のあり方も深く関わっているのだが、それについて論じた先行研究を、中国・韓国で探するのは難しい。たとえば韓国の化粧史は、韓国文化が歴史的に白い肌を重視してきたことを指摘する。だがその背景は、韓国を含むシャーマニズム文化圏が白い皮膚を尊敬する傾向をもつことや、美しい肉体に美しい精神が宿るという「霊肉一致思想」に求められるにすぎない。

これに対してヨーロッパの社会史研究は、アラン・コルバン『においの歴史』¹⁹⁾ や、ジョルジュ・ヴィガレロ『清潔になる「私」—身体管理の文化誌—』²⁰⁾、ジュリア・クセルゴン『自由・平等・清潔』²¹⁾ のような、清潔・衛生といった感覚の展開が、社会の近代化の中で果たした役割を、化粧をはじめとする身体作法の側面から論じている。これらの研究は、ヨーロッパでは19世紀以降、体を洗うことをはじめとする清潔の習慣が、身体衛生の普及を一つの背景に、ブルジョアジーを中心に広がっていく様を明ら

かにしている。垢や化粧品で毛穴を塞がないことが医学的に奨励され、透き通った無臭の体を志向するブルジョアと、不潔な大衆との社会的差異は際だっていく。このような状況は、同時期の日本の清潔文化が医学のあり方とは無関係に、「粋」の美意識として遊郭を中心とする庶民文化の中で花開いたことと、大きな隔たりがある。

またヨーロッパでは近代衛生学が、入浴を中心とする衛生習慣の普及のために、健康的な美しさを人々に宣伝した結果、薄化粧が流行した。それは、若さの美や肉体美の賞賛へと結びつく。これに対し、日本の「いき」の美意識は、健康そのものとは全く無縁であり、むしろ精神的洗練を高く評価する点で、非常に対照的である。

明治維新を迎えて、日本は西洋の身体観・美意識・清潔観・衛生思想の攻勢を受けることになる。そのことによって、日本の化粧意識がどのように変化するかを検討することを、今後の研究課題としてあげておく。

- 1) 「鏡中美女—— 従江戸時代的化粧書看美容意識の変遷」『新史学』第11巻第2期、2000年6月。
- 2) 江戸時代の清潔観と入浴の普及の関係については、拙稿「江戸の銭湯に見る養生と清潔」（吉田忠他編『東と西の医療文化』思文閣出版、2001年所収）参照。
- 3) 石川松太郎編『女大学集』、東洋文庫302、平凡社。
- 4) 前掲『女大学集』所収。
- 5) 室松岩雄編『類従近世風俗志』下巻、名著刊行会。
- 6) 安永4（1775）年版『川柳評万句合勝句刷』収録。
- 7) 江戸時代初期のものでは『女鏡秘伝書』（1650年）がある。この他著名なものとしては『女重宝記』（1692年）、『当世化粧容顔美艶考』（1819年）など。
- 8) 佐山半七丸著・速水春暁画図。東洋文庫414。
- 9) 『新古典文学大系』86、岩波書店。
- 10) 前掲『近世風俗志』。
- 11) この説は1908年の前掲『近世風俗志』に書かれ、以後日本の化粧史は、江戸時代の化粧を論ずるときに、本書のこの記述をよく引用するが、その真偽は検討されたことがない。
- 12) 前掲『近世風俗志』。
- 13) 京都大学頤原文庫蔵本。
- 14) 前掲『近世風俗志』。
- 15) ポーラ文化研究初編『日本の化粧』、ポーラ文化研究所、1989年。
- 16) 佐伯順子『遊女の文化史』、中公新書853、1987年。
- 17) 初版は1930年刊（岩波書店）。本稿では岩波文庫版（1979年）を参照した。
- 18) 全完吉「韓国の化粧文化史」『化粧文化』36号、1997年5月、ポーラ文化研究所。
- 19) 山田登世子・鹿島茂訳、藤原書店、1990年。
- 20) 見市雅俊監訳、同文館、1994年。
- 21) 河出書房新社、1992年。